

# ガーデニングと明治期の家庭園芸

水島 かな江

## Is “Katei-Engei” in Meiji Era Different from “Gardening” ?

MIZUSHIMA Kanae

### Abstract

In this paper, a comparison between concept of “Katei-Engei” in the Meiji-era and that of Gardening in the 1990’s was conducted. References cited for this concept are the contemporary terminology dictionary and some documents relevant to this subject.

As a result, it became clear that "katei-Engei" include the concept of gardening in the 1990’s.

### 1. はじめに

ガーデニングという語が広辞苑に載ったのは、1998年に出版された第5版が最初である。そこでは「園芸。造園。特に、自然の風景をそのまま生かしたイギリス風の庭作りをいう。」と記されている。イギリス風と限定された園芸と造園を含んだ概念だが、誰がどのような立場から行う庭作りかについての説明はない。

「ガーデニング」という語がこの時期の広辞苑に取り上げられた背景には、その前年に、新語・流行語大賞10選に選ばれたことがある。そして、雑誌『私の部屋ビズ』（婦人生活社）の編集長がその仕掛け人として受賞した。この雑誌は1992年にリフレッシュし、「生活のディテールに目を向け、自然の循環を基本のところでは知ること」が、精神的生理的な救いになるような気がするとして、「インテリアと庭を中心に」、住空間づくりの情報も加えた編集へと切り替えた<sup>1</sup>。暮らす側、すなわち生活者を対象とした、生活を心地よくするた

めに庭に関わることの提案である。

園芸・ガーデニング関連の雑誌・書籍などの出版動向を調査した高橋ら(2002)によれば、ガーデニング・ブームは1993年頃から始まっていて、ガーデニングを扱う雑誌は94～97年に増加したという。そして、94年以降、ガーデニングを扱う雑誌の中でも特に、「家庭園芸・家庭菜園」と「香草・山菜ガイド」に分類された書籍数が急増していることを指摘し、「この項目がガーデニング・ブームにもっとも関連が深いと考えられる」(高橋・下村 2002:398)と述べている。

このガーデニング・ブームに関連が深いとされる「家庭園芸・家庭菜園」と「香草・山菜ガイド」だが、このうち、「家庭園芸」や「家庭菜園」については、明治期の、家庭という語が広がり始めた時期<sup>2</sup>に、雑誌や書籍等のメディアによるブームが起こっている。「家庭園芸」については、1900年代に「家庭園芸書」<sup>3</sup>の急増(水島 2008)があり、また「家庭菜園」についても1900年創刊の『婦女新聞』の園芸に関する啓蒙活動の中で積極的に取り上げられている(仙波 1995)。

この流れを受けて、教育の場でも庭が学ぶ対象として取り上げられた。1903年の文部省訓令第2号の「高等女学校教授要目」には、「住居」の内容として装飾や庭園が明記され、明治期の家事教科書には庭の図や園芸についての記述がある(水島 2009)。また、一般家庭でも家庭園芸や家庭菜園等が流行し、1906(明治39)年の読売新聞には、「近来家庭園芸の流行するに随い・・・」<sup>4</sup>とか、「近時新聞も雑誌も園芸記事を多く載せるのでも知られるように少々世間が園芸趣味を解して来た。即ち一は道楽即ち贅沢園芸で、一は引込思案の家庭園芸である・・・(中略)・・・近時の家庭園芸=家庭という字を冠せるのが流行遅れならば素人園芸でも通俗園芸でもよい=は真に花を愛し新鮮なる蔬菜を食膳へ上せようというのが多く・・・」<sup>5</sup>といった家庭園芸や家庭菜園の広がりを示す記事が載せられている。

このように、ガーデニングの中心を「家庭園芸」や「家庭菜園」におくとすれば、日本における第一期のガーデニング・ブームは、1900年代に起きたといわれてよいと思われる。そこで本論では、明治期の家庭園芸をガーデニングの視点から見直すことにした。

方法としては、初めに、新語としてのガーデニングの概念や、ガーデニングに関する文献を整理し、そこからガーデニングという語に含まれる視点や目的等を検討する。続いて、それらをもとに、1900年代の「家庭園芸」をガーデニングの視点から問い直してみたいと考える。

## 2. 現代用語としてのガーデニング

新語としてのガーデニングがどのような概念を含んで登場したのかを知るために、新語、流行語を取り上げて出版される現代用語辞典『イミダス』(集英社)<sup>6</sup>を用いて整理した。毎年出される雑誌のような辞典を資料とすることは余り生産的な話ではなく、実際に整理しながら、その表現にかなり揺らぎがみられることも明らかになった。しかし新語としての扱いを見るのにふさわしい資料が他にないこと、また年刊であるため、その後の変化も見られることから、今回はこの資料を利用し、ガーデニングに関する記述を抜き出した(表1)。

表1 『イミダス』にみるガーデニング

	大項目	中項目	小項目	ガーデニングの説明
1989	生活	レジャー	自然の中の生活	「園芸、造園。花作りから野菜作りまでをいう。…」
1997	産業	サービス産業	個人・家庭向けサービス	「イギリス式園芸・庭園のこと。…」
1998	産業	サービス産業	個人・家庭向けサービス	「イギリス式園芸・庭園のこと。…」
	社会生活	住宅	住宅の構造・設計	「…もともと園芸・造園の意味。…」最近は緑や花を飾る「デザイン作業のことをガーデニングと呼ぶことが多い。」
	ホビー・スポーツ	園芸	園芸界の動向と制度	「最近では園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになり、」 「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的である。」
1999	社会生活	住宅	住宅の構造・設計	「…もともと園芸・造園の意味。…」最近では緑や花を飾る「デザイン作業のことをガーデニングと呼ぶことが多い。」
	ホビー・スポーツ	園芸	園芸界の動向と制度	「最近では園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになり、」 「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的である。」
2000	ホビー・スポーツ	園芸	園芸界の動向と制度	「最近では園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになり、」 「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的である。」

2001	ホビー・スポーツ	ガーデニング	園芸界の動向と制度	「最近では園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになり、「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的である。」
2002	ホビー・スポーツ	ガーデニング	ガーデニングの新傾向	「最近では園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになり、「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的である。」
2003	ホビー・スポーツ	ガーデニング	ガーデニングの新傾向	「近年は園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになっている。「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的である。」
2004	暮らし	ガーデニング	ガーデニングの新傾向	「近年は園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになっている。「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的。」
2005	暮らし	ガーデニング	ガーデニングの新傾向	「園芸、庭づくりのこと。」「近年は園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになっている。「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的である。」
2006	暮らし	ガーデニング	ガーデニングの新傾向	「園芸、庭づくりのこと。」「近年は園芸を「ガーデニング」と呼ぶようになっている。「欧米ではホーティカルチャーという言葉はいわば学術用語、専門用語で、家庭園芸の世界や園芸業者の間では、ガーデニング(園芸、庭づくり)を使うのが一般的である。」

『イミダス』にガーデニングという語が登場したのは1989年、「レジャー」領域の「自然の中の生活」という項目の中である。その説明には「園芸、造園。花作りから野菜作りまでをいう。庭に対する日本人の美意識や考え方が変わってきて、石や灯ろうを置き、松の木を植える代わりに、トマトやナスを植えるキッチンガーデン(菜園、鮮菜畑)を作り、パセリやタイム、カモミールといったハーブ(香り草)園を演出するのが、新しい傾向。自然志向、手作り志向とあいまって、今後地方都市を中心にコンテンポラリーなガーデニング産業の波が起こるだろう」とあり、その後のガーデニング・ブーム<sup>7</sup>を予測した説明になっている。しかし、この項目は翌年消え、次にガーデニングという語が登場するのは1997年である。

1997年には、その取り扱いが「レジャー」から「産業」に移り、「サービス産業」の一つとして扱われた。そこではブームが起きた理由として、『私の部屋ビズ』(婦人生活社)でイギリス庭園が紹介されたこと、銀座三越が1996年に専門店を開いたこと、東急不動産が1995年のイギリス風住宅の売り出しと関連してイギリス風庭園を多く取り上げたこと、そして花関連の雑誌やお店が

増加したことなど、産業側からの仕掛けがいくつもあげられている。

1998年には、さらに「住宅」、「園芸」領域での扱いが加わり、「住宅」領域では、その概念に家やマンションを花や緑で飾るデザイン作業を含んで、プランター、ハンギングバスケット、トレリス等とともに取り上げられた。また「園芸」領域では、わが国では「園芸には「ホーティカルチャー(Horticulture 園芸)」という英語を対応させてきたが、近年は園芸を「ガーデニング」と呼んでいる。」と園芸と同義で扱われた。そして、欧米の例を用いて、園芸を学術用語、専門用語であるホルティカルチャーと区別し、ガーデニングを一般用語として位置づけた。つまり、一般的に用いる場合は、家庭で楽しみとして行っても、仕事として造園業者が行っても、いずれもガーデニングであるとしたのである。また、園芸と同義のものとして扱いながらも、庭づくりという語が加わったりして、その概念は整備されていない。

2000年にはガーデニングの扱いが、趣味や娯楽に関する「ホビー・スポーツ」項目だけとなり、以後その扱いが継続する。そして、2001年には「園芸」項目そのものが「ガーデニング」に置きかわる。しかし、「産業」項目では、アグリビジネスの一つとして、新たにガーデニングビジネスという用語が登場、産業としてのガーデニングの扱いも継続する。

高橋ら(2001:28)は、文献調査から、ガーデニングには「ヨーロッパ園芸の要素である、装飾性やデザインに留意することが、これまでの園芸と区別される」との認識があることを見出しているが、実際1998、1999年版の「イミダス」ではデザイン作業<sup>8</sup>として扱われている。

また2003年には、プランター、ハンギングバスケット、テラコッタなどの多様な容器を含んだコンテナ栽培に、さらに草もの栽培、ミニ盆栽、コケ玉なども含み、屋外の庭づくりだけでなく、屋内のインテリアグリーンにあたるものまで含むものとなっている。

以上のことから、新語としてのガーデニングの意味の変化をまとめると、初めは生活の中のレジャーの一つとして扱われたが、再び登場する1997年以後は、ガーデニングビジネスとして、サービス産業、住宅産業と結びつき、エクステリアデザイン等のデザイン作業の意味も含んできたことがわかる。さらに、初めはイギリス風として導入されたが、以後はその限定も消え、また

屋外だけでなくインテリアデザイン的なものまで含んで、その概念はより曖昧に拡散してきていることがわかる<sup>9</sup>。

このようにガーデニングという語がよりわかりにくくなっている理由は、一方では「ホビー・スポーツ」といった趣味としての位置づけでガーデニングを扱いながら、もう一方で、住まいを快適にすることが意識され、園芸業者などの産業界からの園芸や庭づくりまでも含んできているためと思われる。つまり、ガーデニングが、業者による園芸や庭づくりも含む、植物等を材料に用いてデザインした結果を示すものなのか、あるいは生活の楽しみとして自然や植物と関わる、その行為そのものを指すものなのかが明確でないためと考えられる。

### 3. ガーデニングの概念

白幡（2001:19-20）は、「ガーデニングと園芸は同じではない」として、「人目につく表庭に、目立つ華麗な原色の草花を育てるのが西洋の「ガーデニング」であるという。つまり、「自然を材料にして自己を表現する」のがガーデニングで、その主役は「人」である。もう一方、「園芸」は、「自然を一人一人が心の内に受け止めるもの」で、主役は「自然」であるとする。そして、「園芸」は、「栽培技術と芸術思想を融合させた園芸文化の代表の一つである」近世の盆栽をその源泉とするもので、盆栽にみられる「極小化の自然観」が庭園に及んで坪庭になり、それが都市民の住まいに入り込んで極小の庭園となったという。この視点に従えば、主役を誰とみるかが、ガーデニングを規定することになる。

高橋ら（高橋・下村 2001:28）も、ガーデニングと園芸についての整理から、「園芸」「庭仕事」は、植物の栽培を楽しむものであったのに対し、「ガーデニング」は、植物を栽培するだけでなくデザインして、生活空間の向上に利用していこうとするもの」と解釈されていること、さらに、「単なる趣味でなく、生活の一部であることも特徴の一つとして捉えられていた」ことをあげている。この整理に従えば、キーワードは「生活」で、ガーデニングにおける植物は、「園芸」での主役から、生活空間の向上に役立つ道具へと変わる。そしてガーデニングは、植物にデザインを加えた、生活空間をより快適にする作業

といえる。

さらに鶴島(2009:112)は、西洋では、「庭や庭の植物を管理する」ガーデニング(Gardening)という言葉は、16世紀頃に現れ、20世紀後半に暮らしや生活を楽しむ趣味園芸(Amateur's Gardening)的な意味合いが強くなって、一般化したという。この「庭や庭の植物を管理する」意味から、「暮らしや生活を楽しむ」意味への変化は、「見せる」ものとしての庭から「楽しむ」ものとしての庭、すなわち主役としての庭から道具としての庭への変化が背景にあると考えられる。

新語としてのガーデニングや高橋らの説明には、作業をする主体に園芸業者も含むのかといった疑問も残るが、これらをまとめると、園芸や庭づくりの主役は誰か、あるいはデザインも取り入れて、暮らしや生活を楽しむ視点があるのかどうか、といったことが、ガーデニングの概念を考える上で重要となると思われる。そこで、この点に焦点を当てて、明治期の園芸を見直してみたい。

#### 4. 家庭領域の生成と園芸

園芸や庭づくりの作業がいつ頃から、消費だけの場としての家庭や生活領域に加わったかは定かではないが、1885(明治18)年創刊の「女学雑誌」<sup>10</sup>では、321号(1892年)の「家政」項目に、「ホーム建設の心得」として「庭づくり」の記事が登場する。この記事でとりあげられた庭は、家族の住む「ホーム」を作るためのもので、西洋風の庭も含み、正規則(茶座敷)風か不規則(田舎)風か、その中間かといった庭の様式を問うものとなっている。従って、庭づくりを誰が担うかの説明はないものの、自ら花や野菜を作ってその過程を楽しむといった庭ではなく、植木屋や庭師などによって造られる、様式の整った庭が想定されていると考えられる。

生活する側、すなわち家族で花壇や庭を造ったりすることが提案されてくるのは、明治に入って、労働と生活の場の分離した生活形態を持つ新中間層<sup>11</sup>が増加する過程でのことである。彼らの増加とともに、生活における公と私の分離が進み、明治20年代に入ると、家庭が私的領域となって、「やには」<sup>12</sup>という住居空間としての意味から家族の団欒という規範を伴うホームの訳語

としての意味へと変化する。そして、明治20年代後半に登場してくるのが、家庭叢書、日用百科全書といった家庭領域にふさわしいものがまとめられた全集である。

では、こういった家庭叢書に園芸は加わっているのだろうか。家庭に関する全集の初めと思われる1894(明治27)年から出版された「家庭叢書」(10巻民友社)でみると、第一巻には、『家庭の和楽』(1894)、続いて小児の養育、家庭教育等に関連したものが取り上げられているが、園芸や庭に関するものはない。続く1895(明治28)年から出版された「日用百科全書」(1895～50巻博文館)で、第8編に『住居と園芸』(大橋又太郎編 1896)が、第46編で『造家と築庭』(竹貫直次編 1897)が取り上げられる。つまりここで園芸や庭が家庭領域に加わったと考えられる<sup>13</sup>。しかし、例えば『住居と園芸』における園芸の内容をみると、山水、築山などの造園技術や、接木、盆栽等の園芸技術の説明になっていて、その作業の過程を楽しむというより、出来上がりが想定された園芸や造庭書となっている。そして、カタカナで示される西洋の花なども取り入れられてはいるものの、花園を作るときの心得に、「四時十二ヶ月の間花の絶えざる様に植集ること肝要なり」とか、「花園中に所々道を開きて次第に花を眺むるようすべし」(大橋 1896:181)などがあげられているように、そこでの主役は自然や植物で、園芸や庭づくりが家庭領域に加わったものの、その視点はまだ観る庭、見せる庭となっている。

では、家族の暮らす「家庭」をそのタイトルに含んだ「家庭園芸」はどうか。次に家庭園芸について見てみたい。

## 5. 家庭園芸とガーデニング

「家庭園芸」という語を含んだ最初の書物が出版されたのは1903年、そのタイトルは、『家庭園芸談』(小谷 1903)である。以後、『家庭園芸 第1編 花と母』(三瀬 1904)、『家庭園芸術』(富益・田中 1905)、『家庭園芸 花卉と盆栽』(作間 1905)、『家庭園芸博士(娯楽実益)』(精耕園主人 1906)と次々と「家庭園芸」という語をそのタイトルに含んだ書物が出版され、1906年にはその流行が読売新聞に取り上げられるほど(注5参照)、その広がりスピードは速い。



これらの家庭園芸書を見ると、例えば小谷(1903:1)は、冒頭の「団欒の娯楽」の章の中で、道楽として生花、酒、碁等とともに園芸をあげ、「一家団欒の下に楽しき家庭を作るには園芸をやるに如くは無いと思ふ」と述べている。また三瀬(1904:1)も、「家庭園芸と申しますと、ご承知の如く、私共の前庭後園における花卉、蔬菜、果樹の栽培並に造庭を含みます」とその定義をした後、「すべての家が…其家族の手で耕し花を栽えたり或は苺を作ったりして、其の家庭の幸福を進めるようにしたい」と述べている。つまり、これらの「家庭園芸」は、団欒の娯楽や家族の幸福のために家族の手でするものと考えられている。しかし、その後の説明のほとんどは、栽培技術となっていて、デザイン的な説明は含まれていない。

家庭で行う園芸については、『家庭園芸術』(富益・田中 1904)でより明確に語られる。富益・田中(1904:1, 16-18, 21, 26)は、その書籍の「序」で「園芸は費用の嵩まぬ、興味深い、而して高尚な、雅致に富む業務で、移して家庭の事業とし、家庭の遊戯とするに、至極恰好のものである。」とまずは園芸を家庭の業務、事業、遊戯と位置づける。さらに「園芸と家庭」の章で「家庭の団欒、家族の融和」が社会的に必要であるとし、そのための「娯楽」として「其には園芸が最も適当してゐるであらう。」とする。そして、「其時、其家族の手にかけて花を見ながら、且又丹精をこらして育て上げた蔬菜を味わうならば、其楽しみは又一しほ深いであらう」と、園芸を、家族で行い、家族で楽しむものとするのである。作間(1905)も同様に、冒頭で「家庭の娯楽として、家庭の事業として、我が園芸術は最も適良なせるものなりと信ず。」と述べ、泰西諸国に比べ、日本の家庭に寂寥の感があるのは、家庭の団欒を取るべき事業と遊戯が欠けているからと指摘する。

またこれらの家庭園芸書には、女性と子どもと植物など、植物と人を共に描いた挿絵が多く載せられている。このことは、それまでの、庭だけ、あるいは植物だけを描いた園芸書には見られなかった特徴で、その意味では、家庭園芸書は、人と植物の関わりを意識した新たな視点の園芸書ということが出来る。

以上のことから、1900年代に入って登場した家庭園芸書は、それまでの庭や園芸書とは異なり、家族の団欒を目的として、家族が一緒に園芸作業をし

て楽しむことを勧めるものであることがわかる。従って、そこで行われる園芸の主役は植物ではなく家族である。

## 6. おわりに

ガーデニングが辞書や現代用語辞典などに載るようになったのは1990年代後半で、ガーデニングという語を新語としてみれば、ガーデニング・ブームは、1990年代までなかったことになる。しかし、ガーデニング・ブームの中心となっている「家庭園芸」や「家庭菜園」は、すでに明治期に登場し、一般の人々にも広がっている。そこで新語としてのガーデニングの意味や先行研究からガーデニング概念に見られる視点や目的を検討し、それらを用いて明治期の「家庭園芸」を検討した。

1990年代のガーデニング・ブームは、住まいを快適にする提案で始まった。この視点から見れば、家庭園芸書の内容の多くは、花卉、果樹、蔬菜に関する園芸技術に留まっているため、それらにデザイン的な視点を加えて住まいの装飾とするガーデニングとは異なる。

しかし、家庭園芸書では、それまでの園芸書や造庭書の流れとは異なる、家族と植物の描かれた挿絵が見られ、また、家族が作業し、家族で楽しむ庭が勧められていた。従って、人を主役とし、人が生活を楽しむために行うことをガーデニングと見れば、個人ではないが、家族をその対象とし、家族で楽しむことを勧める明治期の家庭園芸は、ガーデニングに流れる要素を持っていると言える。そして、この視点を重視するなら、日本における第一期のガーデニング・ブームは、1900年代に起きたとってよいと思われる。

## [注]

- 1 『私の部屋ビズ』1992.6 婦人生活社
- 2 家庭という語が、一般に広がったのは、明治20年代から30年代にかけてと言われている。(小山静子 1999『家庭の生成と女性の国民化』 勁草書房)
- 3 ここでは、「家庭園芸」という語をそのタイトルに含む書物を家庭園芸書と呼ぶ。
- 4 「有栖川宮家の万年青」1906.11.19 読売新聞
- 5 「昨今の園芸 近時園芸の趣味」1906.12.8 読売新聞

- 6 現代用語辞典としては、1947年に創刊された『現代用語の基礎知識』(自由国民社)がもっとも古く、1986年から『イミダス』(集英社)が、1989年から『知恵蔵』(朝日新聞)が加わっている。そして、後の二つは共に2006年発行の2007年度版を最後に廃刊になり、現在も継続しているのは、『現代用語の基礎知識』だけである。そして、これを用いたガーデニングの検討は、すでに高橋ら(2001)が行っているが、ガーデニングを一番早く取り上げたのは『イミダス』である。そこで今回はこれを資料として検討した。
- 7 1989年の『イミダス』に、ガーデニングの記述があることには、その翌年の「国際花と緑の博覧会(通称 花博)」の開催が関連していると思われる。この博覧会は2300万を越える、特別博覧会史上最高といわれる総入場者数を記録し、その後のガーデニング・ブームにつながったと言われている。
- 8 『現代用語の基礎知識』(1999自由国民社)でも、「デザイン用語の解説」の中で99年のキーワードとして、その最初にガーデニングをあげている。そこでは「…一般にはエクステリアデザインという言い方はせず、ガーデニングという言葉が使われている。」とエクステリアデザインと同義のものとして扱っている。
- 9 ここでは拡散ととらえたが、『現代用語の基礎知識』(1998)の、初めてのガーデニングの説明(1403pp.)では、「植物を植えたり、ふやしたり、寄せうえしたりする事も、すべてガーデニングと呼んでいる」と園芸・造園にこだわらず植物と関わるすべての作業を包括した概念として扱われている。
- 10 「女学雑誌」は、1885(明治18)年7月に創刊され、1904(明治37)年2月に廃刊されたキリスト教に基づく女性啓蒙誌。新しい女性文化はすべてここから発しているといわれる本格的な女性雑誌で、北村透谷・島崎藤村らも執筆し、後の「文学界」の母体ともなっている。
- 11 新中間層とは、近代的な学校教育を経て獲得された、官公吏、教員、会社員、職業軍人などの家業をもたない階層のことで、頭脳労働という労働形態、俸給(サラリー)という所得形態、資本家と賃労働者との中間に存在、生活水準の中位性をその特徴とする。(寺出浩司. 1994. 『生活文化論への招待』弘文堂)
- 12 やには:「家庭」人の家居、人里。(大槻文彦『言海』1931 第628版 六合館=2004ちくま学術文庫 筑摩書房)
- 13 その後に出版される「家庭文庫」(1987~ 全12編 博文館)や「家庭の新風味」(1901

- 1902 全6巻 内外出版協会)にも、園芸関係をそのタイトルに含んだものはない。しかし、1907(明治40)年からの「家庭百科」には、第15編に『家屋と庭園』(内山正如 1908 博文館)、第26編に『室内装飾法』(近藤正一 1910 博文館)が含まれている。

## 参考文献

- 小谷保太郎. 1903. 『家庭園芸談』吉川弘文館
- 作間余三郎. 1905. 『家庭園芸 花卉と盆栽』大倉書店
- 白幡洋三郎. 2001. ガーデニングと園芸. ランドスケープ研究 65(1)
- 精耕園主人. 1906. 『家庭園芸博士(娯楽実益)』広文堂書店
- 仙波千枝. 1995. 「家庭」の「趣味」としての園芸—『婦女新聞』の例をとりあげて—. 日本文化研究. 筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム紀要 16
- 高橋ちぐさ 下村孝. 2001. ガーデニングブームの実態と背景—雑誌、出版物を通して見たガーデニングブーム—. ランドスケープ研究 65(1)
- 高橋ちぐさ 下村孝. 2002. 雑誌・書籍の出版動向及び記事内容から見たガーデニングブームの実態. ランドスケープ研究 65(5)
- 鶴島久男. 花の文化 西洋編47 ガーデニングの歴史と発展(1)ガーデニングの始まりと庶民への浸透. 農耕と園芸 64(12). 誠文堂新光社
- 富益良一・田中万逸. 1905. 『家庭園芸術』博文館
- 水島かな江. 2008. 近代における園芸領域への家族団らんの浸透—女学雑誌と園芸書の分析から—. 日本家政学会誌 59(2)
- 水島かな江. 2009. 明治期の家政書からみた庭と家族に関する研究. 生活学論叢 15号. 日本生活学会
- 三瀬真若. 1904. 『家庭園芸 第1編 花と母』札幌興農園